



北 204 13



# 小栗外傳

## 絳山翁戲編

北辰政画

文金堂  
合日  
衆星閣

寒燈夜話 小栗外傳卷之十一

東都

絳山戲編

明曆年月日

寄贈

東 藥

### 第十八編

程より彼二人の間の近き程を仰ぎ着るおのづから糸貫川いとぬきがわに遊あそびしむるおのづから其妻の  
 照天てんてんと郎らう常じょうのこころ小こ女めをあれは愕おど然ぜんとして驚おどろろしくは照てん天てんもこ小こ女めもあいひをあいひしるに  
 こころこころならばおのづからも本ほん奈な何なにといふは呆あれなり一盞しん茶ちや付つ互ご互ご言ごん語ごさる顔かほさし合あひく  
 居いるはたたしまぬはつて小こ栗り助すけ手て云いふはたたしまぬはつて不ふ定ぢやう妻さいもこ小こ女めもあいひをあいひしるに  
 可よべしといひまさるといふは何なに等らうのゆ故ゆより只二に人にあはりしるは多おほしきといふは我われがこころに  
 這こゆるのゆゆり不ふ圖とがも過あまらしきりと昨よ夜や妖あや怪かいもあいひをあいひしるに今新にい後ご山さん  
 出いでまるは温おん泉せんのち中ちゆうへお鬼おに押おしをお入いれ執湯しやうのゆあい馬まとあいひをあいひしるに

爛腸く進退心のまじらばるるゆゑ至るまで詳し物語は照天の姫も  
小女も驚愕を嘆くとし人助も命恙なき心をとらぬ。まゝ助借り  
さてやまら。教は別して后身と謹む音伝を俟く忍び付けし百長女児が  
死を嘆くのみならず我々仇とおひひ遂に在家を窺ひ知り人数を傳へ襲  
奪りし折や小女東國より帰り居りし小女小吉郎の二人力を以て  
防ぐと又とも寡の衆に敵對さす。死力を以て切ぬけて辛く脱身し  
其所の終ふ小吉郎しやそ去向をたぬ故まゝ競かた彼を  
搜索し暇なく公女もあど赤井川を走れり忍ぶ方もなく再び百長  
は出余りしうらる憂に遭んぬれ後かさか殿のは跡を慕ひ在國より  
見参して后免も屏もせんぞるぬ俄に思ひまゝとるぐりけり昨日  
三島の驛路を夜渡寺より行上り人助をばしり上人の宣を  
昨夜の音の告あり小栗助重百長が女児の怨霊のまゝ箱根山ゆく  
憶ふこれ不思議の事失を察へ明日此地方を照天姫とてなれば汝彼を教て  
助重を救へんとありしほど今朝より此所をまておと後付り速く  
箱根山を往く救ひまゝ上人の教を以て取りのめりぬと此所を  
入りし小吉郎差りて殿を見参るるの候はりと語るを以て小栗助を  
上人の教今まど空しく感ずるを以て見参りし我々の  
怨むくおんまど怨むは此の上人の宣しりよりやと問はれむ  
奴もいふ事の不審なれば上人に向ひて汝が肌を守りし初者の靈験  
寛鬼威徳を怖して近きゆゑ又亦とあり助重毒湯に浸りしと  
悉く悪瘡となり昔の容貌さうぞ爾れ熊野本宮なる温泉に  
せし速く平愈して故に復さず。あれ湯毒の所みられ名譽のせ湯

わくしへる愈むとてしるべしとてわづも示教し多く足より重に能く  
赴く人となつての事小栗峯府沈思く上人の宜うとて乖へて  
けれど仇討の爲にうぐと此地方まで来りて我身の病を愈さん  
故に後皆やうとてけくも能く山より上へんゆ孝子の道おのるや  
父君父の徳を天と共かせて兄弟の仇を兵を還さんとてさるる  
たへ此身は腸を命と落とも命よりし豫く識し即意のわたりん  
こも取じと肯てつものめおる再び誦ん言結さく爾のくおほと  
昔言ひ常陸へけしむらんとし小女甲斐にしく小栗を背負ひ  
前まゝの家より小栗を休し馬やめると索しにやうく疲る馬乃  
ゆりてを牛角と催ひしやうとて小栗を助けきせ照天がとて  
かきとて常陸の國へと赴きしやう。

○箱根山中毒湯の事とてはなるとて都々温泉の地中を硫黄あり。  
硫黄の毒のきつらめて毒ありや世國那須野の殺し石の玉流る化して  
硫とかり硫の靈魂石とかり人畜死るとしてそのり早に謂ふこと  
ゆりて那須野の温泉あり其湯至りて熱しその邊の石は毒石  
なりこれより殺し石の事を考へて硫黄の氣流るは辺の石を  
ふりてなり毒石とかりしなればはれ石より毒石となりぬ  
水の毒ありしをゆりてやめし高野山の毒ありて思ひますし。  
同誌は頭小栗助重の照天と小女助られ忍びく武井園小女に  
あめさしからぬ南村助重が病癒くに重なり湯を燃れしは  
腐れ破目とてまゝゆも能く照天姫の事なりとて小女もまた  
易にわたりとての旅店に宿りて治療をうとて能く癒ししは  
易にわたりとての旅店に宿りて治療をうとて能く癒ししは

鄙がれがさるべし醫師の病をもくしも怠るは照天姫を公禪し  
祝音の世告を来りし故をうんとしは想ひながら重病を癒め  
夫が凍てせむと痛まじう病をまじひ仲人あつても夜更ありし  
かゝ祝音に祈誓し病のおとせん本年命をたす斯くは阿一色詮秀  
這回下総國まで正領恩賜ありしが先願國をわけて此地の光景地理  
の要害をえむと鎌倉より入るへ下總へ赴くとは俄に大家と  
かりはるやどか従者不足ありしが密に横山を頼むと其の法盜者  
を雇ひて従者の数と満より横山安秀豫り詮秀を縮へその年月も  
従者の中に加りわすし今日此地方とては午の貝あひはるる飯  
せんとて小栗が宿り旅店にもあつて詮秀主従立入るが鎌倉殿の幕臣  
かんがふ家ともしまもるもなく此露路の保山かんと奔走し疾行り  
横山安秀此所所へのほんと庭よりて前載とほる人行りも離れてこれ  
真よ人の慄める声のあつたが不審はる小柴垣次仲ては祝く當所  
照天の糸束の水を汲んで障子を開け立出る中間より横山安秀と面合せ  
愕然とて安秀豫り搜索する照天姫を目前より取りてあつたが  
兎角の事を顔をおどりかつてむき投へ恩は背けられぬ走る婦の白粉ま  
今度投へ往く世に去りぬが両親の光の夫婦代り庭訓せしむる  
よと牽きたる照天姫此年以て念と想ふ父の仇も達するはさへも斯く  
まじいあつたはるることかれば怒り日比も十字に傷を放さば短刀指で逆  
め指提へ腕をうひ押し声を願ひきりたげんは身は二つと母上の兄をわく  
めり好がるは應永七年の秋父上名武篤光と相持川にて非業なる死  
るあつたあつたやと奴家親子と知るはと思ふて欺れた人もは所父の



天竺の  
武臣の  
の  
宿の  
山  
遺



西

東

命をうける助けもせん思ひおせふと年前ゆが夫と想ひける小栗助を  
 不図も我家は漂泊するやうなる。天の賜物此年以帯しとて人なきを  
 討みくちやと議りしが彼も此く武義と知りぬるも猛攻をねらふ  
 人教を拵ぐるのみならず討漏さんともやと毒酒をりて謀りし思ふ  
 壺の差ひひきよも謀りしと思つてこそ此月の九日とぞんえ  
 たり我營生のそのるよ部下どもと引具し箱根山より我を行  
 遭旅人の難ある人となはせんと鬼師の駒ふらち家へ小栗お  
 はげへうもなほ甚怪しと思ふらち間近く歩こすまはけはよや今世は  
 亡魂のうらも生しよのても憎しとぞ助主と着きたるも定まらば  
 於下どもに下知をば討たんと追欠し彼山中のありし地獄谷の  
 逃失たり。さて只今うらと小栗のこの地獄を我が地地方とぞんえ

恨をこえんその為か幽魂現れ出る体よと思ひまじり今日まじりも疑ひ  
 さうお晴やじ。汝とまじりて助主の身のなる果を知りはくめつと結り  
 けし縁と威しつ滄流しつ同もを照天姫の仇人組まはせ今  
 まま夫の身の上と同らるるの腹さしく怒の涙は胸迫り。罵らんぬ声  
 生を波より舐れるもは小女の怨天が最前より。そんぬ不審此下彼下  
 尋ねて此所へ捜しものててのわらうも。ま老人の照天姫を組  
 めめて。聖の居るころるよりも。言詰をもいらを。横山捉くぐりて投  
 姫を助け牽起せば。照天の喜びおき上り。落せし懐刃をよと小はすと  
 高く寒はく。小女は好くも喜ぶるよ。今日不意横山。出合はさる父の  
 仇討まじり女子の甲斐る力及び。返り付もやなりんと。あか処と  
 助けられ再生され仇人を討たる人おん身よく助太刀とて。まじりて横山



目がけ進み来る。小女これを見よも。雀躍するも喜びん。さうさうそれなる  
 老人は彼横山まきわりの所は主君の敵脱さうと。才徳ひさるその際お  
 横山御守記事。小女勢ひかほをえ我一人の力あを敵對かじと  
 思ひん。さうお城ありお舎と声さる中も呼りねば。横山が部下の老とも  
 さうおもひさう一色の多勢一般におしあるあも。小女は此所こるよりも  
 照天姫さうら對ひ宝山入ながら。妙坊の出来ある。時至らぬとさえ  
 ころ。お身の上さう失われぬ悔し詮をえらるあれば。一まぶ此所を屠るあ  
 某殿は踏さるまら。勢耐故を防ぐお彼人とはひく。何方も脱れ  
 多人さやとくくと劫ひねば。照天姫も大勢はまお移られておかみくと返  
 討事なるぬべ。はしそれとも父の為此身はさうお厭はれど。大軍の  
 める夫の身お及んことを危るあ。小女が海は随ひつ。奥の方へも走入り。  
 程もあせさう多勢の人敷地お走まれば。安秀小女指さし。彼を  
 名武が家子もて小女さうらりのぞし。さう一年は我許を。出奔しはる  
 姫女が。方人さうと尾お移も。まれをさる曲者さう。あれ討えと言語の  
 下心さうと一般は得物さうさうら振く。脱まはしと。取囲さう。小女は  
 一生懸命と腰刀と抜放ら。さう向は押罵たれ。横山安秀は。おまき  
 汝昔限るた悪行さう。故をりて。鎌倉殿の心お氣受。お願も家も  
 失ひく。さう人さる牙を我ら君縁者の好牙は不便とかけ。お版さうあ  
 鴻恩と亡却さうと去来。相摸川で人おれど。失ひせし。不義非道。  
 とお知らしてありはる。お天おは。お人さうりて。云おむと。おけりな。さうさ  
 後。姫君の知ら。さうさ東の方も。さう捨棄さ。鯉お。お姫の。お身お  
 妻の。お。さうと。重りて。今日。今。さう。徒。さう。小。年。月。さ。さ。さ。ひ。お。日。の

孝公自皇天の憐れ多しと不圖も今日御出命な斯むる天の助ありとの  
 加勢のれがとて脱くことなぬ先非を悔くことなり此討刀を受  
 よとて斬りかき部下をも隔りまき殺たり亦小女は武勇あり  
 且忠義我身を捨て必死なうて働け目くらまら五六人枕と並ぶ  
 討たり此光景も人々の恐怖をひき近きほど小女もかくとて  
 負うるに裡ふ想あやうめざと敵の横山之益益の人を殺さんなり彼と下  
 太刀恨えんと四方を望み向ひる廳堂の揺るひえりある喜ぶしや  
 一教も走り寄んとする小女ささぐまを討せんとて部下もかゝ隔力を  
 ばしてまへまり小女焦燥進みちじ禄の辺も迫りあり主君の仇れ  
 横山は今こそ思ひ如きあれと太刀よりよく切んとも危うきこと  
 かゝ障子の裡より突然と一条の糸をひき取り小女が胸もぐさごととま  
 急所の痛もふはしりの小女呼とのつけ倒れたり嗚呼憐れし忠は此  
 一箭のめあきも此亦も命を墮せし豈悼まらむ小女非をやせ討障子と  
 さと用き一色詮秀ゆくと弓箭たえさみゆるぎ出されぬ下討の我勢  
 ぞて非業の死に倣思さるるといと誇りあらしうへる安秀低頭平身  
 相公の一箭のめあきも小臣が命危うりに仁惠を無さうとの忝なり  
 恩を謝されば最前よりの光景を障子の裡で粗々ぬ小女の既も討苗  
 たり照天を早く御さり小栗が生死を掬問われと云ふ安秀実雨りまら  
 走りのほほいし追著て生捕んと部下どもを討て照天を跡を退くなり  
 こゝも照天眼の小女が流しまり夫助手を助けて馬もさすその身自ら  
 馬を牽下総の方へ走りしが女はあひし武義社のゆけども秒の  
 果てると右も限りなくまを流し流しは助くも嘆あまて人足るなり

さうゆかく。旅行の人も少されぬ。猛き丈夫も細く。惱はし。照天姫の  
我夫の重き病。悩めるを。優恤つても。辛うして。此下まで。脱れするうちも。  
跡は残せし。小女が。を。か。る。兔や角と思ふも。愛小行前の。道。定  
らぬ。舟。後。只。公。の。昔。も。ね。それ。さ。入。る。小。助。さ。い。と。中。の。疾。病。若。よ  
み。み。さ。ら。ぬ。い。い。を。り。つ。て。遙。々。た。道。を。馬。上。も。急。ぎ。し。や。今。今。や  
此。下。至。り。て。才。も。勞。也。地。死。ね。る。な。ら。ま。に。馬。上。は。嬌。を。道。葉。の  
上。ま。が。と。さ。ふ。り。照。天。の。慌。忙。用。章。つ。助。け。抱。ひ。し。懐。中。の。女。を。合。し  
ぬ。を。か。と。四。方。を。顧。れ。ど。水。の。外。に。絶。え。る。じ。い。ふ。こ。の。奈。何。せん。と  
嘆。つ。才。の。幸。さ。ま。ら。か。ら。い。裡。に。思。ふ。夫。今。か。病。ま。す。杖  
とも。頼。じ。老。僕。を。我。く。夫。婦。を。落。さ。んと。殿。下。の。大。勢。を。只。一。人。で。防  
な。れ。死。生。の。ち。ど。も。斗。え。ね。ね。今。日。い。う。る。悪。目。で。死。な。す。目。や。重。て。と。と。  
流。涙。と。嘆。き。し。い。とも。憐。む。の。光。景。か。り。か。ら。嘆。の。その。下。へ。送。の。殿。より  
大。勢。の。驚。ひ。も。も。り。の。こ。も。め。れ。と。く。修。寺。の。人。と。顧。望。の。方。見。ま  
横。山。安。秀。大。勢。の。部。下。も。と。俱。と。驚。ひ。ま。る。光。景。も。休。も。舟。へ。き。く。こ。も  
なく。涙。を。ら。り。愕。然。と。前後。不。言。し。が。あ。ら。心。を。り。率。一。危。急。舟。迫。せ  
唯。く。も。斯。く。居。らん。云。甲。斐。は。昔。在。五。中。の。女。と。捨。く。此。舟。辺。に。逃。げ  
申。吟。く。耳。り。あ。か。て。追。入。の。龍。を。い。ま。て。捜。索。を。れ。ど。草。茂。く。索。う。後。は。ら  
此。野。辺。を。燒。んと。と。は。と。き。その。女。は。武。藏。野。を。け。つ。ら。ま。ま。と。皆。州。の。は。い。ま。ゆ  
こ。の。ま。り。我。も。こ。の。ま。り。と。流。る。る。舟。を。男。と。終。わ。た。ま。り。たり。か。る。例。の。あ。る  
な。れ。と。それ。の。ら。ま。に。は。蟻。と。と。あ。れ。の。敵。舟。難。の。九。死。の。うち。一。生。を。得。る  
こと。難。き。災。害。の。脱。れ。ぬ。ま。り。も。あ。り。は。け。肌。守。の。祝。音。も。危。難。を。助。け  
終。れ。と。丹。滅。く。し。後。り。る。當。附。一。人。の。老。僕。が。鉦。うち。ら。び。出。ま。り。追。入。の

りのふ行對ひ何てやん説法が衆徒の力なく。りと来り踏ん走りどねを  
 老傍中て這行ますり。やよや夫婦のくよ。今日の危難を遭ふことへ佛の  
 教を乖ぐ。さぞ慈野へ行どて。さらば迎ふまひ。とて。さへをせむく  
 照天姫より仰向きて。てのれ。思ひもかけぬ。夜法の行上人をりし。を  
 且の登り。且の登り。と。たぐりの限なく。雪中の炭闇夜の烽火。はるこら  
 きた。膝へ涙を前ならぬ。中めて。極首へ上人の示を乖き。東國より。とてし  
 こ。の畏たれ。定ま。深き故めりて。下総さ。て行んとし。此辨。う。及りり。  
 慈を不図上人の助め。よ。脱。は。危難。と。此。免。り。そ。も。く。誰  
 告。今日。の。横難。知。り。し。此。事。お。じて。大意。を。無。夫婦。を。再生。さ。し。ま  
 ひ。いと。有。が。じ。と。お。れ。か。と。感佩。と。れ。上。人。ら。ら。實。實。つ。ま。り。る。り。は。亦。は  
 佛の加護ありて一回。う。と。幾。回。救。せ。ま。も。も。と。と。れ。今日。のおん。の

うの。い。も。又。親喜の告。より。慌。忙。く。走。ま。り。それ。は。仏の。出。告。も。差  
 を。横山。が。進。ま。り。し。お。出。命。へ。これ。を。欺。き。還。り。し。り。助。を。と。の。太。平。何。ぞ。と。  
 絶。入。り。し。助。を。欺。ま。り。し。女。保。を。れ。の。中。に。其。甲。斐。あり。て。雙。生。さ。た。り。れ  
 息の。間。より。して。上。人。を。こ。を。涙。を。流。し。あ。智。を。智。の。元。夫。我。懐。の。素。懐。を。還。入  
 と。て。いと。畏。た。れ。も。仏。勅。を。乖。ぐ。事。今日。に。及。ぶ。て。定。淨。佛。の。正。罰。なり。その。罪  
 の。之。脱。ま。ぬ。ん。斯。惡。瘡。再。極。め。り。と。ても。再生。期。か。じ。世。も。う。ま。ま。と。奴。も  
 せ。赤。毛。の。尾。を。殺。す。も。の。上。人。と。ま。こ。め。れ。ら。ち。慈。の。回。意。々。ら。ん。  
 一。回。仏。勅。を。乖。ぐ。と。り。と。と。を。先。非。を。悔。く。志。氣。を。改。む。ら。ん。大。表。の。冥。助  
 字。か。ん。や。日。あ。る。も。中。て。本。復。せん。これ。より。本。慈。野。山。本。宮。の。師。を。赴  
 る。と。や。さ。し。と。劫。ひ。ら。助。重。涙。せ。ま。り。を。あ。ま。有。く。や。此。上。の。教。を。伺。せ。  
 慈。野。山。へ。乞。山。か。り。て。本。宮。の。温。ら。く。浴。し。と。く。め。と。佛。よ。こ。ん。来。し。と。あ。り。

蘇



常阿



照天

助重

武藏の野  
 天照の  
 良人の  
 奇癖  
 と嘆

馬よ。ほまを悩め。世より遙き慈母路へ行べきことの難かれ。うち  
か。ち。は。ま。の。ま。の。り。の。ま。の。上。入。賢。舟。考。へ。斯。の。病。も。長。途。の。旅。行。お。ほ。ろ。ろ。か。り。と  
宣。の。道。理。好。が。圓。通。の。覆。庇。あ。る。と。人。お。我。ま。ま。の。術。の。ま。の。は。り。  
暫。時。こ。ゆ。行。ま。と。云。は。し。何。方。に。去。ま。る。一。盞。茶。付。あ。つ。て。忍。ち。ま。し。行。車。所。  
控。ま。り。夫。帯。に。對。ひ。ま。り。た。れ。と。い。ふ。助。ま。を。ま。ま。の。形。の。車。の。後。を。ま。り。  
乞。兒。の。ま。の。し。て。行。ま。今。小。栗。の。容。貌。を。熟。く。え。る。瘦。瘠。湯。の。爛。を。み。  
心。を。こ。の。ま。瘡。と。る。て。醜。く。彼。地。獄。の。写。經。と。い。は。る。餓。鬼。の。彷彿。ま。て。  
姿。容。貌。の。形。ま。り。寒。の。思。は。難。め。り。て。小。栗。ま。の。人。こ。の。お。り。人。を  
ま。ま。の。ま。の。雨。う。り。の。途。中。に。雙。言。の。害。を。免。れ。ん。叔。母。の。女。を。追。う。れ  
旅。を。只。一。人。に。行。車。を。牽。ま。る。艱。苦。の。あ。つ。て。思。ひ。あ。れ。た。力。を。命。ん。と。い。ふ。ま。ま。  
小。栗。の。首。に。う。け。牽。引。ま。る。自。ら。勞。を。休。む。ま。ま。の。あ。ま。ん。か。筋。に。准。備。

あ。ろ。ろ。一。箇。の。木。札。と。り。中。小。栗。が。音。が。け。り。ま。り。照。天。を。れ。て。う。ら。ま。る。お。  
右。因。再。生。翁。名。餓。鬼。阿。弥。丁。回。季。此。車。供。養。十。僧。同。に。名。字  
を。写。り。照。天。を。乞。と。精。深。く。恩。深。く。そ。の。上。人。の。徳。恩。の。め。り。忘。り。期。や  
信。ん。あ。ま。ま。と。も。有。と。と。感。の。涙。せ。ま。の。ま。伏。沈。ま。も。拜。し。ま。う。は。  
小。栗。も。と。り。其。感。佩。の。涙。結。か。ま。る。行。実。許。回。の。終。首。は。く。も。恩。と。謝。し。お。  
う。り。を。付。上。人。又。曰。ま。る。篤。く。謝。し。も。ひ。も。お。ん。ま。ま。と。負。道。と。ら。ま。は。ま。  
因。縁。あ。れ。ら。と。七。一。回。と。い。ふ。再。と。回。大。悲。大。悲。の。観。音。の。我。お。の。こ。公。勅。め。り。て  
政。の。ま。の。佛。恩。を。も。莫。大。な。れ。冥。助。の。ほ。と。め。ひ。ま。る。康。男。が。あ。る。ま。ま。ひ。て。  
我。は。是。より。下。總。や。常。陸。の。方。へ。去。れ。く。彼。中。も。思。は。十。人。の。計。を。達。し。還。金。  
お。ん。ま。ま。の。光。景。ま。り。小。栗。が。死。亡。の。舞。う。り。大。詳。を。告。知。し。跡。より。娘。お。ん  
赴。り。病。平。愈。の。耐。と。待。宿。志。を。遂。げ。し。ま。ま。と。袂。を。ま。ち。と。上。人。も。下。総

さしつゝおのむきさつし。

第十九編

千里の車と牽て佛助を祈る  
一朝の病愈く神徳を仰ぐ

且説小栗助平は老所上人の教を仰し、慈野の行をなすは、東海道  
あり憚ることもなされ、木舟路を登り、助重を車に乗せ、照天姫の  
形容がたふ、百家衣をまとい、破中笠も面が蔽陸し、全く乞丐の  
心の中も憐れ、過世の作業も幾許の憂、以て芳村の里に旅を  
道装をふみ、入さしと板橋をち渡り、行をなす、注馬人の助重を  
不審とて、素首小ぢり、木れを流して、任行上人の助け、多分、餓鬼小  
こも、さも因縁のあり、は、ゆめ、ゆめ、や、車、瓜、牽、引、て、功、徳、も、修、き、千、俵、の、目、郎

似る才の病い愈はし、多し花咲る春に達し、多し縁と伏拜する跡、あは  
行け、東都もや、る、る、日、日、異、作、の、伏、見、の、里、旅、行、人、の、足、さ、入、も、流、の、煙、や  
いと、つ、つ、秋、の、夜、涙、と、朝、日、影、さ、も、各、各、つ、つ、終、波、津、の、じ、じ、か、つ、つ、の、橋  
概く、四天王寺を、越、首、つ、牽、引、小、車、の、き、ら、と、牽、引、和、田、の、赤、八、十、寺、  
か、け、清、水、と、海、士、の、小、舟、の、楫、を、断、ち、ひ、ひ、お、お、才、の、上、れ、う、う、を、さ、さ、う、な  
旅、古、歌、の、公、の、あ、れ、さ、思、ひ、和、泉、の、信、田、な、る、本、林、の、楠、千、枝、よ、ま、き、  
物、あ、つ、る、才、人、も、我、こ、の、ち、き、な、れ、憂、世、と、う、み、葛、の、里、と、う、く、世、入、  
紀、の、國、や、和、舟、の、浦、波、う、ち、あ、せ、て、芦、間、の、霞、も、夫、奴、つ、れ、と、う、も、さ、さ、  
似、は、れ、も、つ、つ、夫、多、才、の、病、か、つ、つ、あ、あ、る、涙、と、潮、丁、の、人、の、神、の、石、の、  
乾、く、隙、さ、入、る、旅、の、日、数、を、預、け、お、お、と、け、行、車、牽、引、も、慈、舟、の、藤、井、  
多、も、つ、れ、抑、態、野、權、現、も、も、も、伊、持、徳、伊、持、舟、の、も、も、て、神、武、帝、れ

此村より此比に岳跡まで来て今も不朽の靈場なり。爾より本朝諸神の  
 中に唯一と兩部の二つの唯一と多きは伊勢皇太神のてく。經と巴と信  
 尼を禁じ、渾く仏法を用ひざる。これを唯一不二の社とて又支部とらるる。  
 本社の傳を授け、常には施をせし。後尾奉仕傳まり。こゝに既戸  
 皇子佛法弘通し、より以來我國の久しきを崇むるも、より神と  
 ども國の習俗人の志向を受ひ、和光同塵ましく。垂跡の仏陀を  
 かり多しむ。此奉多く弘法傳教の兩大師建まらる。西のく、此は神も  
 りのこほりなり。支部の社となり。本宮澄誠殿をりて、弥陀と定ち新宮  
 なる。其の末社に至るまで夫の卒地あり。こゝに關らるる。足と載と。且、流  
 照天姫と熊野より看より、女の才よりとらる。東の果より南海  
 の熊野より、容易く、旅なり。は、病るまで、優恤の車と牽りて  
 事ゆゑ、不思議も、怪し、是正し、熊野持現の擁護と、観世音の  
 冥助も、旅客照天の房小伏り、車とひ、牽り、雨ののり、とらる。身  
 主かれ、艱苦、變り、之き方なり。身心とも、勞れ、は、嶮、岨、ある湯の  
 峯、るまで、車と中、人、き、道、も、な、く、こゝに、ゆ、り、上、人、と、を、怪、り、往、り、  
 山上、望、み、て、を、こゝに、此、當、村、湯、峯、に、登山、する、と、お、わ、り、た、信、の、五、六、人  
 ろ、ち、連、り、只、今、此、所、中、身、か、る、じ、う、小、栗、容、貌、の、怪、し、な、を、入、不、宜、は、け、ら  
 止、り、首、飾、は、木、れ、を、流、ら、ち、驚、ひ、く、照、天、對、此、饑、鬼、病、を、直、に、  
 かの、阿、上、人、因、縁、の、と、お、ほ、え、る、り、う、く、奈、何、さ、る、人、か、り、や、せ、類、る、ま、  
 病、う、お、と、云、へ、る、を、は、は、照、天、姫、い、と、方、か、る、も、哀、し、く、伏、せ、て、嘆、ら、か、ら  
 涙、を、お、し、ら、め、や、は、傍、よ、是、の、東、山、方、の、り、の、ゆ、て、奴、家、が、ま、ま、と、る、こ、不、圖  
 此、惡、き、病、を、京、斯、徒、り、き、貌、お、な、り、ぬ、常、阿、上、人、由、緒、と、な、れ、け、こ、と

百人 卷之十一

十一



葉きやせし上々憐れ。これに態母本宮の温泉湯浴を平念す。  
 ことあらし。示し入る。嶮くして。此山へは。ひき。と。その。侍。と。おん。山の。  
 嶮。岨。な。山。上。へ。入。れ。術。を。な。れ。ぬ。何。も。せ。ん。と。思。ひ。悩。み。て。め。よ。は。侍。達。の。この。  
 地方へ。入。り。ま。せ。め。め。七。章。なり。か。に。嶮。岨。の。山。も。車。次。か。る。ま。き。道。の。り。や。教。  
 さ。せ。め。し。極。と。ら。ら。嘆。き。ほ。く。ま。こ。い。ま。ら。衆。傍。憐。れ。て。法。衣。の。袖。を。湯。  
 せ。り。形。附。め。り。て。其。中。の。老。傍。進。も。出。衆。傍。を。顧。り。て。云。此。女。性。夫。の。名。も。  
 身。を。ま。ま。と。違。け。き。旅。を。恙。も。く。此。山。よ。り。ま。る。難。路。の。い。ふ。情。を。い。は。し。め。り。  
 其。後。ま。か。れ。ぬ。と。い。ひ。且。に。控。行。上。人。の。此。車。を。牽。り。の。其。功。徳。を。傳。へ。供。養。  
 せ。り。小。回。り。ま。き。と。書。字。ま。ま。木。れ。め。り。の。ま。や。入。り。此。車。を。湯。浴。を。ま。し。め。り。の。か。し。  
 め。ら。れ。り。や。こ。い。ふ。衆。傍。肯。ひ。ら。い。ふ。女。性。は。ま。ま。の。い。ま。に。と。く。且。に。控。行。上。人。  
 の。ま。ま。ま。か。こ。も。め。れ。ぬ。我。れ。力。を。ま。ま。と。湯。浴。を。入。信。ひ。ま。め。り。を。ま。ま。と。ま。んと。

或の総を牽りあり。ありし車をももめて。若く山ふもとに。その。附。  
 老傍りりり。是より道も嶮。車次。か。る。易。り。か。ん。光。あ。る。こ。  
 なる。山。寺。少。滞。多。人。彼。西。の。藥。王。山。東。光。寺。と。号。し。本。ま。る。湯。の。泡。沫。吹。り。ま。  
 造。り。せ。め。し。ま。る。藥。師。は。な。り。昔。より。此。山。湯。浴。を。老。東。光。寺。の。お。ま。る。  
 小。新。法。法。して。生。媛。湯。り。く。至。り。ま。れ。ぬ。女。性。も。爾。ま。多。人。と。い。ひ。つ。傍。の。  
 去。ら。り。照。天。姫。の。ま。ま。ひ。く。此。教。ま。ま。し。車。を。牽。り。東。光。寺。少。滞。多。人。藥。師。  
 ぬ。身。を。伏。拜。ま。ま。の。病。速。也。平。愈。め。り。ま。る。を。願。ひ。し。それより湯。峯。へ。こ。  
 赴。き。し。助。重。長。途。の。勞。れ。や。い。と。悩。ま。し。た。ま。は。な。お。お。姫。の。ま。ま。り。側。を。こ。る。  
 岩。間。の。下。に。車。次。を。お。附。り。ま。る。居。る。ら。ち。中。あ。ら。う。と。え。り。終。に。止。じ。か。り。  
 公。安。姥。の。ま。ま。も。勞。れ。我。れ。よ。あ。ら。う。と。草。を。食。食。す。時。も。な。ら。枕。の。り。と。  
 白。髪。の。光。緒。歩。ま。り。多。し。善。哉。と。照。天。姫。汝。女。の。身。を。の。ら。し。か。る。大。後。に。

く 屈もせと山川海を越えり。夫の  
みよき者とする。熱い少なる貞節と香  
なつも控況の汝が赤心とくん感  
あつて助き病苦を救ひ給せり。  
我とて神意を生かしたる助き  
あま是思孝の志き篤れ老るるが  
平積善の餘慶もて沈病を  
快せんとく浴室の中を  
下へ



▲下のつき  
時刻を後さし障りもあへん前加ゆ  
傍流助き車と助け牽けりし由  
控況の方便もて官のみの耳をこふ  
響の草の松風も夏森のなみん  
醒し。あつて病の次もあつて夫の側  
偶ゆり。照天の睡醒く后神勅の  
の有さく信心も濃く感の  
涙も杖を流し此上のゆき疑ひ



惑うん。いぎこ云はく。小車の総と凡多に甲斐もまた女もくも念力の強き  
 らしく丈夫も及ぬ巖や松が根も厭つて車を牽たれど苦うく岩小攀  
 けり。此北方の則足温泉の湧きて金佛の薬師あり。そのる像廿二の穴  
 あり。其穴より温泉湧き。痼病を治する。万が一も差ひはこれ。此神  
 方便の至妙なり。照天の夫が抱き。ササ師のる。軀より出る温泉を灌き  
 かかれた不思議なる用牙爛は。処瘡と形。膿汁流て臭氣をじり。お  
 其瘡悉く癒を結び。臭氣失れ。娘との靈験の新々を感じ。  
 指況の神恩。瓜の裡お。尚祚力権護を加へると祈念。く  
 急候。く。日本三回。浴き。お神明。仏陀の奇特。空。か。後日。も  
 預る。お病。漸くと愈。く。十日。お満。と。さ。しも醜。く。瘡。愈。て。骨。肉  
 昔。一。復。原。の。小。栗。助。重。の。仕。う。る。身。と。なり。け。る。不。思。議。と。い。ふ。も。餘。あり。

助重。と。さ。ら。も。い。ら。む。と。照。天。の。衣。び。大。さ。か。は。足。記。世。音。の。冥。助。と。  
 慈。野。持。現。の。神。力。と。且。と。常。阿。上。人。の。道。徳。や。あり。の。と。夫。婦。諸。と。も。お  
 慈。世。三。山。上。順。れ。ま。照。天。の。守。本。誓。れ。記。世。音。を。拜。し。ま。つ。り。お。ま。ま。ま。  
 東。國。の。方。と。伏。拜。み。常。阿。上。人。の。恩。を。謝。し。ぬ。後。助。重。照。天。お。う。ひ。も。身。  
 仏。神。の。助。よ。る。て。斯。平。愈。を。做。ら。し。と。お。ん。牙。信。の。公。保。か。く。山。火。滅。え  
 川。を。渡。り。て。いと。遠。れ。武。者。よ。り。して。も。る。ぐ。と。紀。伊。國。なる。果。お。恙。な。く。も  
 到。る。と。を。ほ。つ。り。此。恩。の。忘。は。き。と。懇。せ。れ。を。の。が。ね。姫。を。送。り。く  
 り。お。思。ひ。も。か。ね。ぬ。お。ん。夫。人。の。妻。と。して。お。夫。天。と。し。仕。う。る。と。珍。じ  
 か。ね。こ。も。ぞ。じ。され。ば。夫。の。為。に。お。ん。肉。持。者。に。な。さ。と。も。い。う。て。お  
 厭。ひ。や。と。長。途。の。旅。を。預。り。と。い。ふ。と。仏。神。王。法。の。三。恩。と。殿。の。洪。福。を。て  
 幸。ひ。お。恙。な。く。と。ほ。つ。れ。い。て。奴。家。が。力。も。及。り。や。と。お。の。が。艱。苦。を。せ。し

こと此も誇りて涙のいと多し申すは人々助を妻のかこまると今ふ  
 といぬ事好から。千辛万苦を勞とせぬ志氣が精とせぬ情おも懐恤  
 感謝の涙が咽びさる。主婦の間に終あはれいともしみじき好述を  
 斯て小栗助を病まると愈へる今もや一日も早く宿志がとぞん  
 ことおひと東國に居る即儀も且と小を即が音同なるれ敵の中へ  
 夫婦のみ行へと思ふはくはまれば今夢く人の動静を待ん  
 とて熊野山の麓に。かごころの家を営み夫婦とれ居りぬ。そのうちも  
 日毎現る事おぼし。神明の加護を祈りたり。

○前々熊野山の事記をさし其のの長々たる本文は讀の妨  
 なし載せ小栗靈湯ふて全快をされ一件既々満備とまら今  
 幼童の爲に茲に熊野持記の畧縁記を述く神明の徳を知じし  
 こと尤のまじし。

○熊野権現 今妻郡社領千石 △祭神三座 △伊弉並尊 △事解  
 男神 △速玉男神。 神武天皇五十八年お出現し伊弉冊尊の  
 垂跡なりと云云本宮の申す神天皇の十六年お始て建立しなす  
 新宮の景行天皇五十九年建立あり。耶智と龜山院文應年中お  
 建立ありふとて是を熊野三所持記と出かちなり △熊野権現  
 證滅殿 本地阿弥陀 △兩所持記 本地菩薩観音 あと又新宮と云  
 △若一王子 本地施無畏大士 △飛瀧権現 本地千手観音

○右四件ハ習合の説なり。  
 凡熊野権現の事ハ旧事記古事記日本記纂疏神名帳その他  
 雜書に記とこと此區く申す一定に諸説長文也。容易

かゝる福がごとく小峯おのげを退あひぞひて畏うこも其要まに老くる終まに和光わこうの影かげ  
仰あやげらるる高たかく永世えいせいに神徳かみとくを失うせざるを速はやく而已のみ

○古いにしへ天子てんし熊野山くまののやまに御幸ごのきありしに平城へいせい天皇てんこうと始はじめと云いふ山院さんいん一度いちど  
白川院しらかわのいん五度ごど堀河院ほりがわのいん一度いちど鳥羽院とりづのいん八度はちど後白川院ごしらかわのいん三度さんど代々たいてい乃なり  
天皇てんこうと云いふ斯かき信しんははまませせに神徳かみとくの新あらたなる措さて知しる也なり

小栗外傳卷之十一畢 北邨芳

北邨芳  
小栗外傳卷之十一

